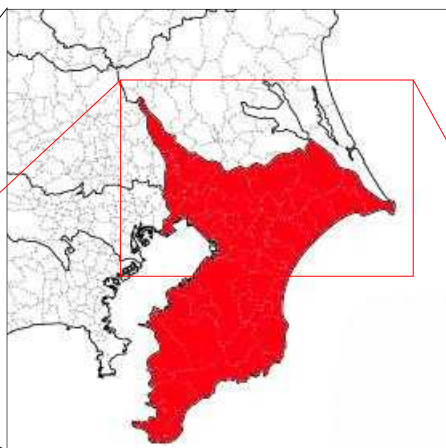


① 申請者	◎千葉県（佐倉市、成田市、香取市、銚子市）	② タイプ	地域型／ シリアル型 A B C D E
③ タイトル	「北総四都市江戸紀行・江戸を感じる北総の町並み」 ー佐倉・成田・佐原・銚子： 百万都市江戸を支えた江戸近郊の四つの代表的町並み群ー		
④ ストーリーの概要（200字程度）			
<p>北総地域は、百万都市江戸に隣接し、関東平野と豊かな漁場の太平洋を背景に、利根川東遷により発達した水運と江戸に続く街道を利用して江戸に東国の物産を供給し、江戸のくらしや経済を支えた。こうした中、江戸文化を取り入れることにより、城下町の佐倉、成田山の門前町成田、利根水運の河岸、香取神宮の参道の起点の佐原、漁港・港町、そして磯巡りの観光客で賑わった銚子という4つの特色ある都市が发展した。</p> <p>これら四都市では、江戸庶民も訪れた4種の町並みや風景が残り、今も東京近郊にありながら江戸情緒を体感することができる。</p> <p>成田空港からも近いこれらの都市は、世界から一番近い「江戸」といえる。</p>			
 <p>成田 香取 鹿島 息栖 細見絵図（千葉県立中央博物館蔵）</p>			
⑤ 担当者連絡先			
担当者氏名	千葉県教育庁教育振興部文化財課 副課長 大野康男		
電話	043—223—4082	FAX	043—223—8126
E-mail	y.oon7@pref.chiba.lg.jp		
住所	千葉県千葉市市場町1番1号		

(様式 1－2)

市町村の位置図（地図等）

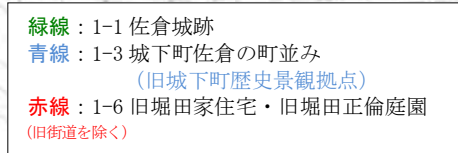


千葉県

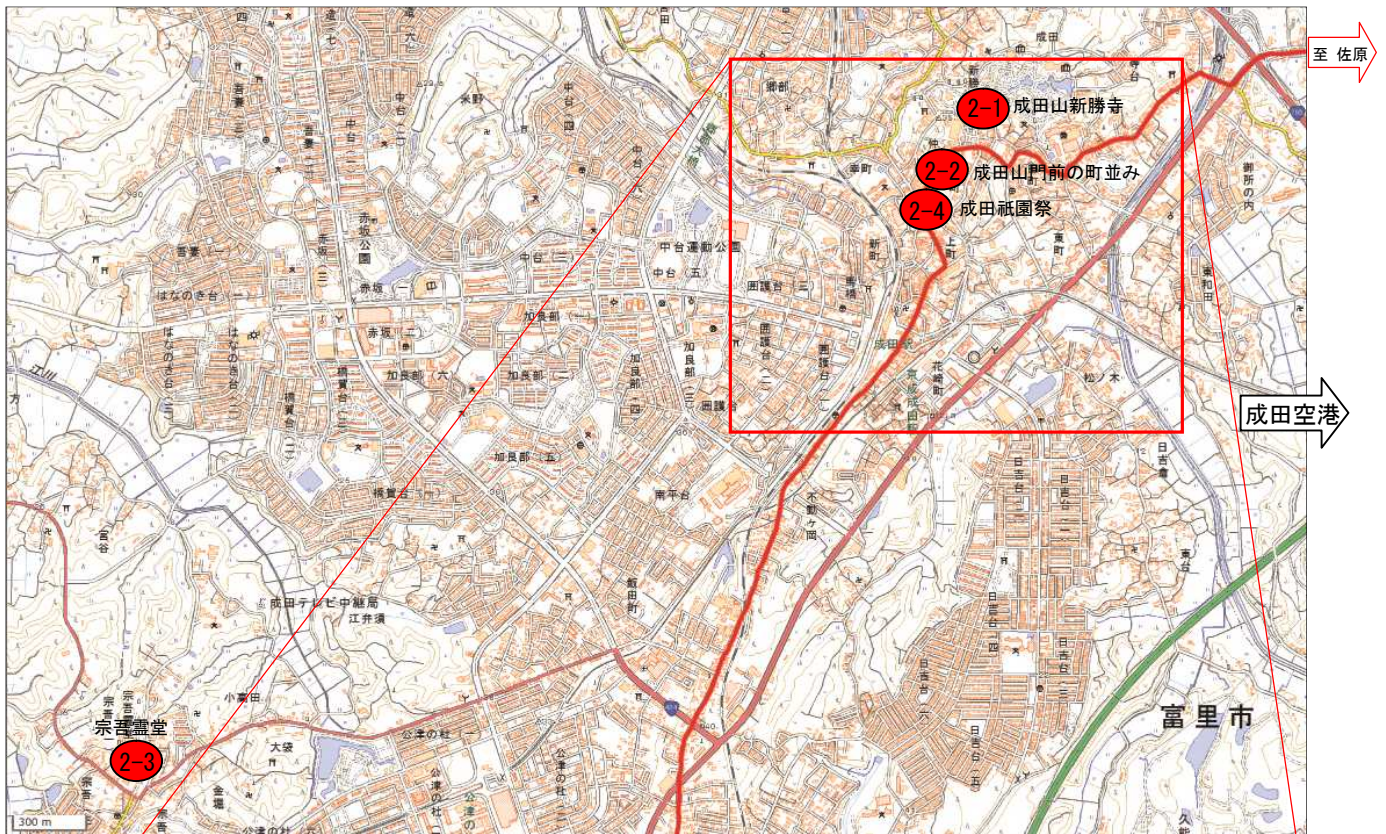


※ 地図中の赤(太)線は、旧街道を示した。
香取神宮については、旧参道も赤(太)線で示した。

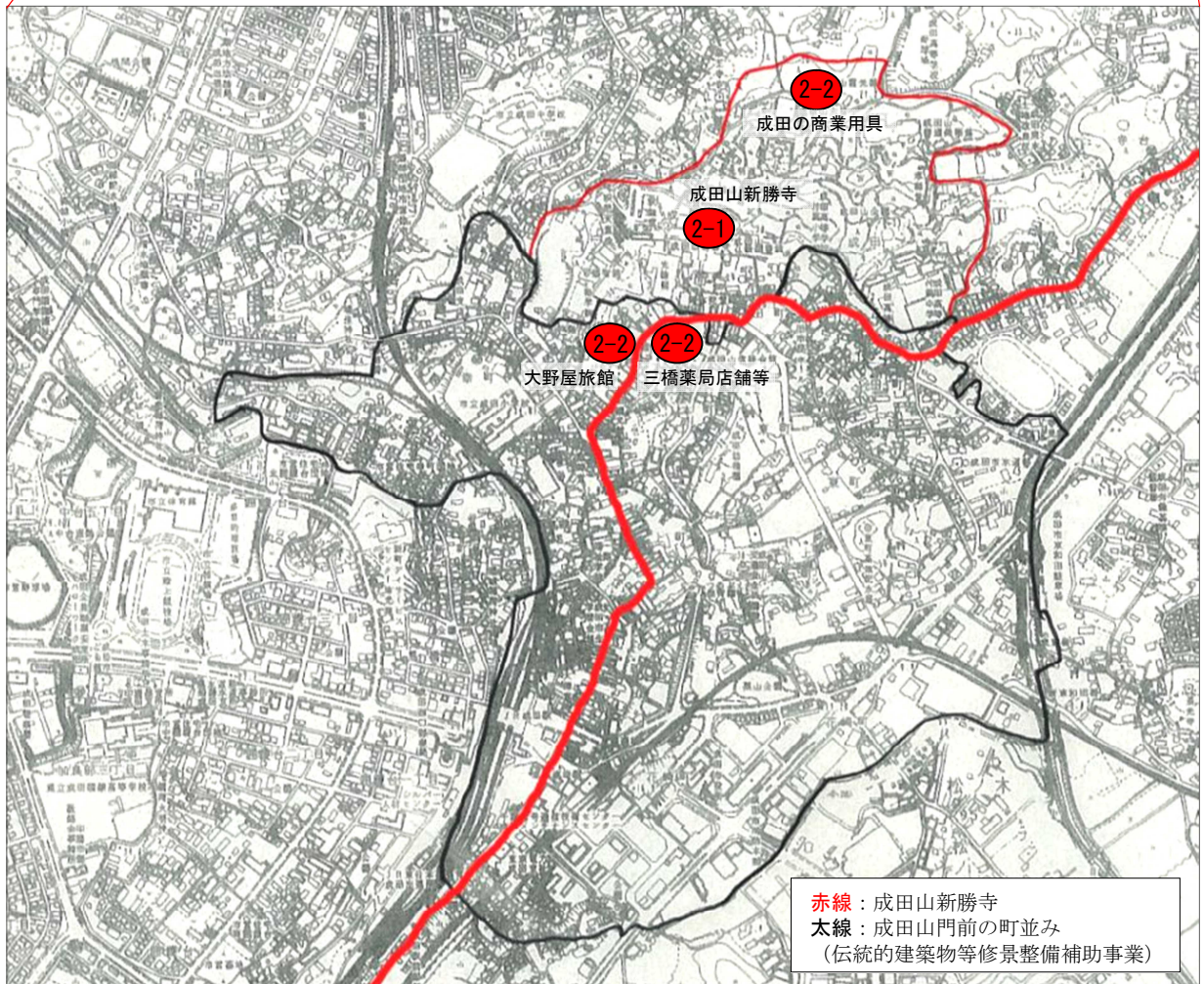
1 佐倉市



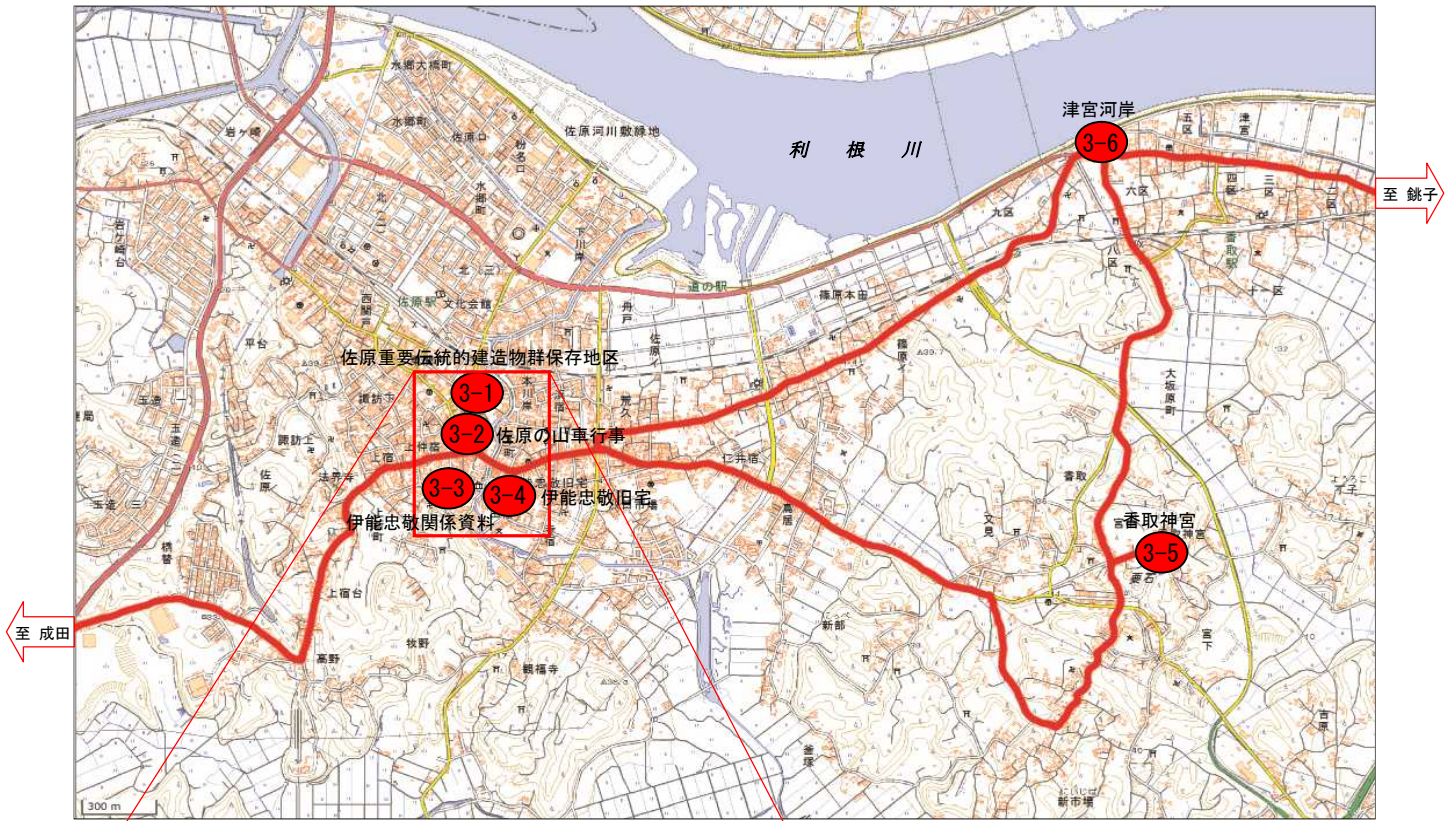
2 成田市



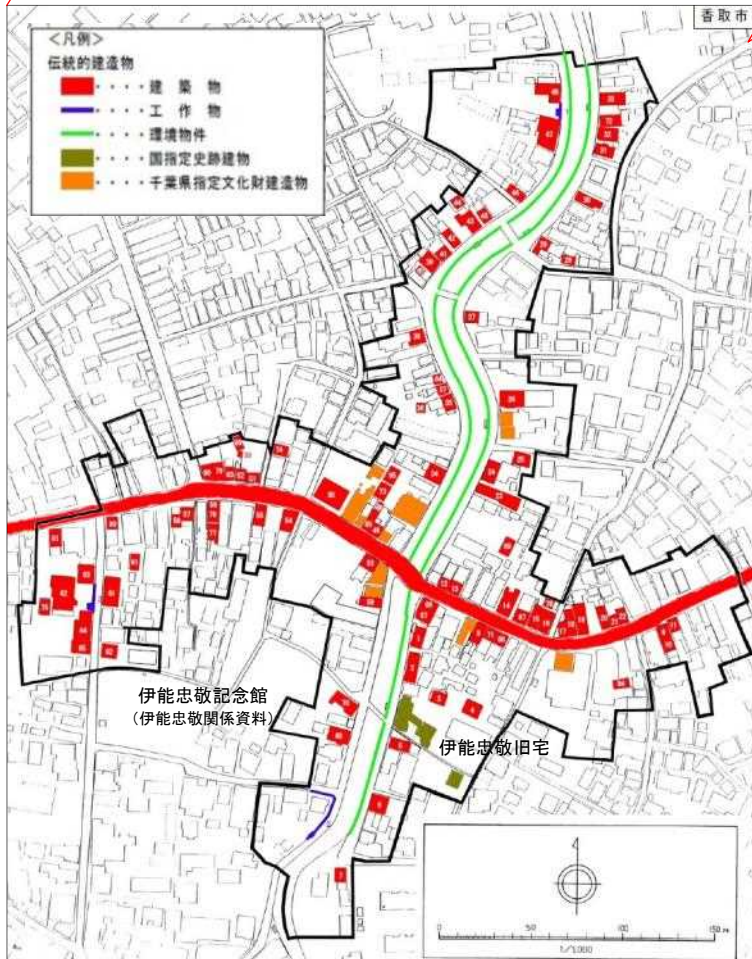
2-2 成田山門前の町並み



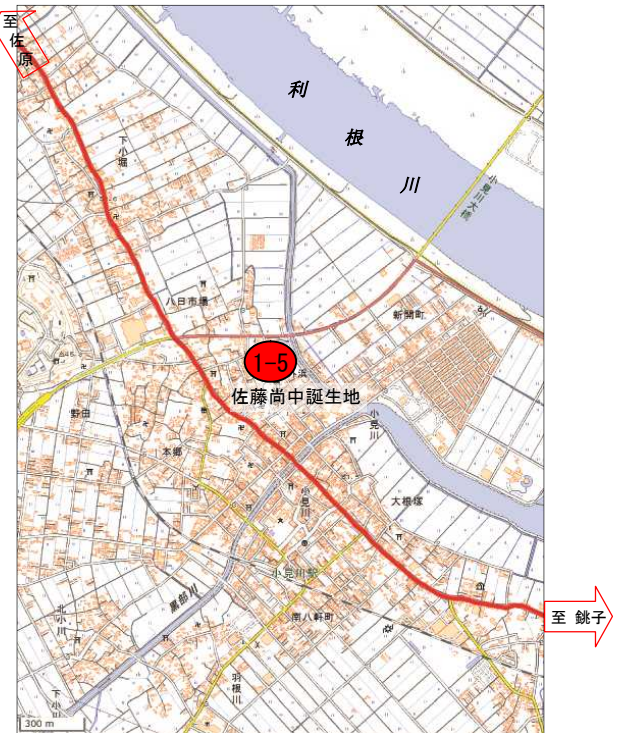
3 香取市



3-1 香取市佐原重要伝統的建造物群保存地区



1-5 佐藤尚中誕生地（香取市小見川）



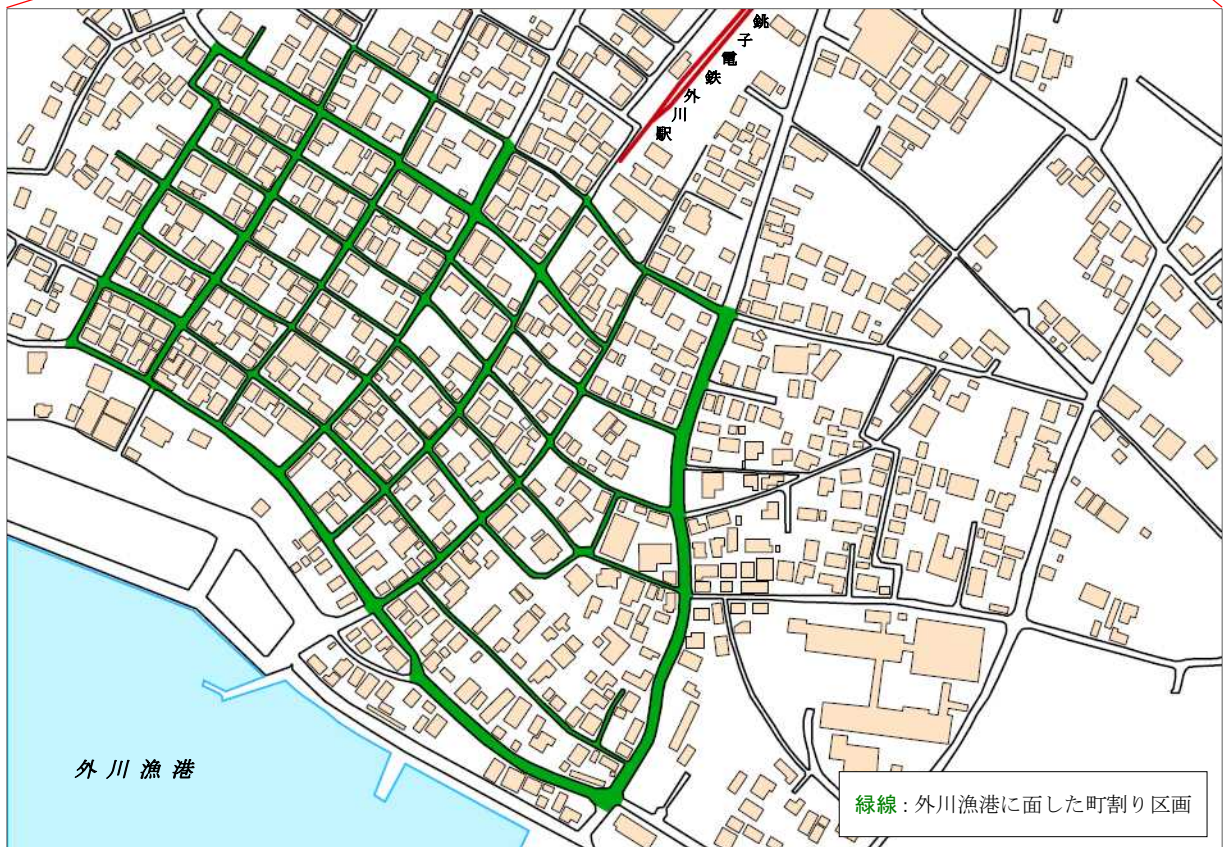
4 銚子市

3

至佐原



4-1 外川漁港に面した町割り区画



構成文化財の写真一覧

○佐倉<城下町>



1-1 堀田氏の居城（市史跡 佐倉城跡）



1-7 大老と老中の墓（県史跡 堀田正俊・正睦・正倫墓）



1-2 石高150石の武家屋敷（市有形 旧但馬家住宅）



旧佐倉藩資料を展示（国登録建造物 佐倉高校記念館）



1-4 近代医学発祥の地（県史跡 旧佐倉順天堂）



1-8 洋書（県有形文化財 鹿山文庫（ハルマ和解等））



1-6 重要文化財旧堀田家住宅・国名勝旧堀田正倫庭園



1-9 江戸型山車（市有民/市無民 城下町佐倉の祭礼）

○成田＜門前町＞



2-1 大勢の参拝客で賑わう成田山新勝寺の大本堂



2-2 門前町のうなぎ屋の店先



2-1 旧本堂 (重要文化財 光明堂)



2-2 成田土産の一粒丸を販売(国登録建造物 三橋薬局)



2-1 七代目團十郎の石像も奉安(重要文化財 額堂)



2-3 義民村内惣五郎の墓もあり成田参詣者も訪れた宗吾霊堂



2-2 門前町の旅籠(国登録建造物 大野屋旅館)



2-4 門前の町並みと山車(成田祇園祭)

○佐原<河岸・宿場町>



3-1 伝統的な町並み (佐原重要伝統的建物群保存地区)



3-4 佐原の大祭 (重要無形民俗文化財 佐原の山車行事)



3-1 伝統的な町並み (県有形文化財 伝建保存地区)



3-5 朱色も鮮やかな楼門 (重要文化財 香取神宮楼門)



3-2 伊能忠敬の店 (国史跡 伊能忠敬旧宅)



3-5 東国の守護漆黒の本殿 (重要文化財 香取神宮本殿)



3-3 伊能忠敬が描いた地図 (国宝 伊能忠敬関係資料)



3-6 ここで舟から下りて神宮の参道こ (市有形 津宮河岸の常夜灯)

○銚子<港町>



4-1 斜面に基盤目状に造られた 外川の町並み



4-1 江戸時代の区画が残され、道が直交している外川の町並み



4-2 漁師の女性たちが織り始めた銚子縮 (県無形文化財)



4-3 大漁節にも
謡われた海の神
川口神社の大
潮祭り



4-4 漁師の納屋(西廣家住宅)



4-5 廻船問屋(国登録磯角商店主屋)



千葉県下総国海上郡銚子町醤油醸造家浜口儀兵衛店部分



4-6 1616 年創業 ヒゲタ醤油 1645 年創業 ヤマサ醤油



六十余州名所図会
下総銚子の浜
外浦
(歌川広重)

4-7 屏風ヶ浦
(国天然記念物
答申)



4-7 千騎ヶ岩
(国天然記念物
答申)



4-7 犬岩（国天然記念物 答申）と富士山



4-7 犬吠埼白亜紀浅海堆積物（国天然記念物）

○ガイド施設
国立歴史民俗博物館



佐倉城跡に建てられた国立歴史民俗博物館



展示のようす

房総のむら



再現された江戸から明治の町並み（商家の町並み）



農村歌舞伎舞台で民俗芸能の公演



甲冑試着体験



お茶のお手前の体験



再現された囲炉裏

ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称 (※ 1)	指定等の状況 (※ 2)	ストーリーの中の位置づけ (※ 3)	文化財の所在地 (※ 4)
1-1	佐倉城跡 さくらじょうあと	市史跡	江戸の東を守る要として、1611年より約7年をかけて徳川家康の従兄弟にあたる土井利勝(老中、後に大老)が築城。土塁、空堀、水堀、馬出しを巡らした城構えは、「日本三城の内と言伝る」と当時の記録にも評される堅牢さであった。堀田正亮(老中首座)が1746年に入封以降は、堀田氏の居城として幕府を支えた。 本ストーリーのガイダンス施設としての国立歴史民俗博物館も城跡内に位置している。	佐倉市
1-2	佐倉の武家屋敷群 ①旧河原家住宅 きゅうかわらけじゅうたく ②旧但馬家住宅 きゅうたじまけじゅうたく ③旧武居家住宅 きゅうたけいけじゅうたく	県有形1件 市有形1件	佐倉城築城にあわせて、城の東に連なる台地上に武家屋敷と町屋を配置し、城下町が整備された。現在も昔ながらの区割りや家屋が多く残され、宮小路町字鍋木小路の通りには三棟の武家屋敷が公開されている。これらの屋敷は、天保年間に制定された佐倉藩の「居住の制」(武家屋敷の規模や様式は、居住する藩士の身分の象徴であり、藩が住宅の基準を定めた)に合致しており、 当時の藩士の職階に沿った住環境を具体的に知ることができるよう整備・公開されている。	佐倉市
1-3	城下町佐倉の町並み ①旧平井家住宅 きゅうひらいけじゅうたく ②佐藤家住宅 さとうけじゅうたく ③山口家住宅 やまぐちけじゅうたく ④石渡家住宅 いしわたけじゅうたく ⑤三谷家住宅 みたにけじゅうたく	県有形1件 市登録3件	江戸へ向かう佐倉道(成田街道)は、城下町をほぼ東西にはしり、防衛上の工夫からクランク状に屈曲しており、その他の道路・地割もほぼ当時の形状を保っている。街道及びその周辺には、「旧佐倉順天堂」のほか、近世から近代の歴史的建造物(武家・商家)が現在も遺されており、城下町の風情を感じることができる。	佐倉市
1-4	佐倉道(成田街道) さくらみち なりたかいどう 道標 どうひょう	無指定	土井利勝が佐倉藩主になると江戸～佐倉間の街道は整備され、佐倉藩主だけではなく、近隣の大名も参勤交代に使うほど重要な街道となった。また、この街道は、江戸中期以降江戸庶民の「成田詣で」で賑わうようになり、成田街道と呼ばれるようになる。 街道沿いには現在も多くの道標	佐倉市

			<p>が残るが、中でも井野にある道標「成田山道」は、七代目市川團十郎が寄進したもので、江戸庶民の成田山信仰の象徴的なものである。</p>	
1-5	<p>きゅうさくらじゅんてんどう 旧佐倉順天堂 さくらじゅんてんどういしがく 佐倉順天堂医史学 しりょう 資料</p> <p>きとうたかなかたんじょうち 佐藤尚中誕生地</p>	<p>県史跡 市有形</p> <p>県史跡</p>	<p>天保14年（1843）、蘭医学者として名を馳せていた佐藤泰然は、当時の佐倉藩主で蘭癖とまで呼ばれた老中堀田正睦の招きで江戸から佐倉に移住し、医学所「順天堂」を開設した。以後この地は、多くの優れた人材を輩出し、日本の近代医学発祥の地となった。佐倉が蘭学（洋学）の先進地たる象徴の一つである。また、幕末から近代の日本医学史を知ることができる、「佐倉順天堂医史学資料」も残されている。</p> <p>下総国小見川出身の佐藤尚中は、泰然の養子・後継者となり、東京に順天堂医院を設立するなど、日本近代医学の中心人物となった。</p>	<p>佐倉市</p> <p>香取市</p>
1-6	<p>きゅうほつたけじゅうたく 旧堀田家住宅 きゅうほつたまさとめていえん 旧堀田正倫庭園</p>	<p>重文 国名勝</p>	<p>最後の佐倉藩主である堀田正倫の邸宅・庭園。正倫はここを本邸とし、旧領佐倉のために尽力した。特に藩校「成徳書院」をもととする佐倉中学校（現在の県立佐倉高校）に多くの支援を行い、父正睦と同じく佐倉の教育の発展に貢献した。旧堀田邸は、旧大名家の気風を今に残し、正倫の業績を偲ぶことができる場所である。</p>	佐倉市
1-7	<p>ほつたまさとし まさよし 堀田正俊・正睦・ まさともはか 正倫墓</p>	<p>県史跡</p>	<p>佐倉藩主を長く務めた堀田家の菩提寺である甚大寺にある墓所。墓所内には、正倫、旧藩士によって建てられた正睦の追遠碑もあり、昭和11年には浅草から大老堀田正俊の墓も移されており、大老と老中の墓が並んでいる。堀田家が佐倉において地域結合のシンボルであったことを示している。</p>	佐倉市
1-8	<p>ろくざんぶんこかんけいしりょう 鹿山文庫関係資料</p>	<p>県有形</p>	<p>藩校「成徳書院」に所蔵されていたわが国最初の蘭和辞典「ハルマ和解」をはじめとする貴重な古典籍群。特に蘭書（洋書）は、質・量ともに他藩を凌ぐもので、佐倉が蘭学（洋学）の先進地であったことを如実に伝えている。</p> <p>成徳書院は、現在も途絶えることなく、県立佐倉高等学校としてその歴史を刻んでおり、古典籍群は「鹿山文庫」として管理されている。</p>	佐倉市

1-9	じょうかまち さくら さいれい 城下町佐倉の祭礼 ① 麻賀多神社神輿 ② 麻賀多神社神輿 渡御 ③ 旧佐倉町の祭礼 用具 ④ 佐倉囃子	市無民2件 市有民2件	江戸の祭礼文化を脈々と受け継ぐ城下町の祭礼。佐倉藩総鎮守麻賀多神社の大神輿の渡御、各町の山車・御神酒所の引き廻し、江戸囃子の流れをくむ佐倉囃子の演奏など、様々な要素に江戸の祭礼の息づかいが今に残っている。祭礼に登場する山車は、佐原・成田などとともに、利根川流域に分布する江戸型山車の一つでもある。	佐倉市
2-1	なりたさんしんしょうじ 成田山新勝寺 (光明堂) (釈迦堂) (三重塔) (仁王門) (額堂) (木造不動明王及び 二童子像) (薬師堂) (鐘楼) (一切経堂) (清滝権現堂) (輪転経蔵)	重文6件 市有形5件	寺格の格上げと、江戸での出開帳による熱心な布教活動、初代市川團十郎の深い帰依(父の生まれが成田近郊で、跡継ぎに恵まれず成田山に祈願し、後の二代目團十郎を授かった)、團十郎が演じる歌舞伎「成田山分身不動」の大ヒットなどにより、江戸庶民から不動明王に対する篤い信仰を受けた成田山新勝寺。寛政3年(1791)からの100年間で、1,300以上の講社が結成され、江戸での旅行ブームも相まって、多くの参詣客を集めた。現在では、正月三が日の参詣客が300万人に達するまでになっている。	成田市
2-2	なりたさんもんぜん まちなみ 成田山門前の町並み ① 大野屋旅館 ② 三橋薬局店舗等 ③ 成田の商業用具	県有民1件 国登録2件	成田山新勝寺への参詣客を迎える表参道に展開した門前町。参詣客の増加とともに商売を行う家も増え、天保14年(1843)には、旅館32軒、菓子屋22軒、居酒屋20軒をはじめ、158軒の店が確認できる。 旅館では、参詣客の疲れを癒すために、利根川・印旛沼の川魚料理でもてなしたが、銚子の醤油の味付けで江戸で広まったうなぎ料理が、この地でのうなぎ料理を一層活発にさせた。 創業が元禄時代の三橋薬局では、「はらのくすり 成田山一粒丸」が売られている。その昔は、道中薬と言われ、成田山新勝寺に訪れる旅人が、この薬ひとつを持参していれば何病にも良いとされていた。	成田市
2-3	そうごれいどう 宗吾霊堂	無指定	成田山新勝寺への信仰が広まる中、江戸からの参詣道の途中にある宗吾霊堂も、市川團十郎家門下である四代目市川小団次が、佐倉惣五郎(木内惣五郎)の生涯を描いた歌舞伎「東山桜莊子」を演じ、これが	成田市

			ヒットしたことから、江戸庶民の信仰の対象となり、成田山詣の帰路に立ち寄ることが定着していった。	
2-4	なりたぎおんまつり 成田祇園祭	無指定	江戸の祭礼文化を脈々と受け継ぐ門前町の祭礼。成田祇園祭は江戸時代から約300年続く伝統的な行事で、江戸囃子と佐原囃子が融合した全国的にも珍しい祭りである。成田山新勝寺の本尊である大日如来を「ご尊体」とした御輿が渡御し、合わせて各町から10台の江戸型山車や屋台が一斉に繰り出す。	成田市
3-1	かとりしさわらでんとうてき 香取市佐原伝統的 建造物群保存地区	重伝建	佐原は、利根川の東遷により小野川が利根川と繋がると、その利根川の舟運と香取街道や銚子道といった陸路との接続点であることから、利根川の代表的な河岸として、江戸への荷の集積地として栄えた都市で、小野川沿いとそれに直交する街道沿いに多くの商家が軒を連ねた。また、佐原は「東の灘」「関東灘」とも呼ばれ、酒造業も発展した。 佐原の町では、旦那衆と呼ばれる豪商達による住民自治が行われ、利根川水運の隆盛とともに、彼らの自主性に富んだ精神と豊富な資金に支えられ、多くの職人衆が江戸から佐原に呼び寄せられた。江戸の職人衆の技と佐原の旦那衆の粋。この交流により、佐原には江戸に優るとも劣らない伝統・文化、「江戸優り文化」が花開いていった。	香取市
3-2	いのうただたかきゆうたく 伊能忠敬旧宅	国史跡	佐原村本宿組の名主を務め、酒造業や米穀売買などを家業としていた伊能家。現在は、この地に正門・店舗・土蔵・書院が残る。	香取市
3-3	いのうただたかかんけいしりょう 伊能忠敬関係資料	国宝	物資の流通により江戸を支えた佐原河岸。小野川右岸の商家伊能家の10代当主伊能忠敬は、名主として佐原の繁栄に尽力した。忠敬は、50歳で隠居し、後に江戸に出て、天文学・測量術等を学び、寛政12年（1800）から文化13年（1816）までの10次にわたり日本全国の測量を行い、その成果は「大日本沿海輿地全図」（合計225枚）および「大日本沿海実測録」（全14巻）として忠敬の死後、文政4年（1821）に完成し幕府に上呈された。	香取市

3-4	<small>さわらだしぎょうじ</small> 佐原の山車行事	重無民	<p>商業で江戸を支えることで、大きく繁栄した佐原。その経済力と、江戸の祭り文化の影響から、佐原囃子の調べにのって、美しく立派な山車を曳きまわす佐原の山車行事が出来上がっていった。山車の飾りは、初めは地元の民の手作りであったが、後には江戸職人による等身大の人形になり、さらに現在の「生人<small>いきにんぎょう</small>」と呼ばれる大人形へと変わってきた。特に、「生人形」は浅草で「人形ハ、ヤスモトカメハチ」と謳われた人形師三代目安本亀八などが制作している。</p> <p>佐原の発展なくして、現代まで継承されるこの祭り行事は存在し得なかったといえる。ユネスコ無形文化遺産に推薦されている「山・鉾・屋台行事」の一つにもなっている。</p>	香取市
3-5	<small>かとりじんぐう</small> 香取神宮 <small>ほんでん</small> (本殿) <small>ろうもん</small> (楼門) <small>かとりじんぐうきゅうはいでん</small> (香取神宮旧拝殿) <small>かとりじんぐうしんこ</small> (香取神宮神庫) <small>しんとくかんおもてもん</small> (神徳館表門) <small>こううんかく</small> (香雲閣) <small>かとりじんぐうはいでん</small> (香取神宮拝殿・ <small>へいでん</small> 弊殿・ <small>しんせんじょ</small> 神饌所) <small>しんぼうるい</small> 神宝類	国宝1件 重文4件 県有形2件 県天記1件 市有形2件 国登録2件	<p>香取神宮は、古くより軍神として信仰され、歴代の武家政権からも武神として崇敬された。</p> <p>本殿・拝殿（現祈祷殿）・楼門などの主な建物は、徳川五代将軍綱吉が造営した。また、香取神宮のシンボリックな楼門の額は海軍大将・東郷平八郎の筆であり、現在も武道分野からの信仰が篤い神社である。</p> <p>江戸時代には、鹿島神宮・香取神宮・息栖神社の「東国三社巡り」は、「お伊勢参りのみそぎの三社参り」と呼ばれるほど篤い信仰を集めた旅であった。伊勢へのおかげ参りより身近にできる北総地域への旅、成田山新勝寺、香取神宮、銚子磯めぐりと、陸路を歩き、船旅を楽しむ旅が人気となり、<small>きおろしちやぶね</small>木下茶船に揺られて旅する香取神宮は、江戸庶民のささやかな贅沢となった。</p>	香取市
3-6	<small>つのみやか し じょうやとう</small> 津宮河岸の常夜燈	市有形	<p>香取神宮の一の鳥居が利根川に面して立つ津宮鳥居河岸。かつてここは、香取神宮への表参道口だった。水運が盛んなころ、<small>わたなべかざん</small>渡辺華山や<small>あかまつそうたん</small>赤松宗旦など多くの文人墨客がこの地を訪れた。川岸には利根川筋最古の常夜灯1基が燈台の役目として建てられた。</p>	香取市
4-1	<small>ちようしとかわ まちなみ</small> 銚子外川の町並み	無指定	<p>江戸の人口増加は、より多くの鮮魚の供給を必要とした。江戸前の海だけでなく、銚子沖の漁場からの鮮魚の供給は不可欠なものとなった。</p>	銚子市

			<p>紀州から移住した^{さきやま じろう そ もんもん}崎山治郎右衛門が波止場の築港工事を行い、碁盤目状のまちづくりをして、外川港の繁栄の基礎を築き、支えた。</p> <p>「外川千軒大繁盛」という言葉のとおり外川港は活気に満ち溢れて、江戸からの増加する鮮魚の需要に應えていた。</p>	
4-2	^{ちようしちぢみ} 銚子縮	県無形	<p>漁業の町銚子。「底板一枚下は地獄」といわれるほど厳しい漁に出かける漁師の家を守る女性が出漁の安泰と豊漁を祈り、木綿の織物を生産した。各家で織った銚子縮は集荷され、^{たかせがね}高瀬船に積まれて利根川を遡り、江戸の花街などに出回り、江戸の粋を表す織物としてもてはやされ、全国にその名が知られた。</p> <p>地元の網本や船頭はこの銚子縮を使った^{まいわい}万祝を着用していた。</p>	銚子市
4-3	^{ちようしたいりようがし} 銚子大漁節 (^{かわぐちじんじゃ} 川口神社) (^{まいわい} 万祝)	無指定	<p>銚子の漁業を象徴する民謡。元治元年（1864）、長引く不漁から未曾有の豊漁となり、漁師たちが感謝の意を表すために唄を作り、漁船の守り神である川口神社に奉納した。この歌詞には、江戸期の銚子の漁業の背景が盛り込まれている。</p> <p>銚子大漁節は暮らしに溶け込んだ大切な歌であり、各町内会にある鳴り物保存会が継承している。また、鳴り物の中には、「はね込み太鼓」や「はね太鼓」と呼ばれる技法があり、勇壮な見せる太鼓として人気が高く、国内外で演奏会を開催している。</p> <p>また、この唄は小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が「漁師の数え歌」として英訳している。</p>	銚子市
4-4	^{にしひろけじゅうたく} 西廣家住宅	無指定	<p>紀州から移住し、江戸時代末以降の銚子漁業を支えた船主の一人である。当時、銚子沖であがった鰹は「鰹の生腐れ」といわれるように足の速い魚であった。西廣家では鰹節生産を開始し、鮮魚だけではなく、加工品でも江戸の食文化を支えた。</p>	銚子市
4-5	^{いそかくしょうてん} 磯角商店	国登録	<p>利根川河口に位置する銚子湊は、東北からの東廻り海運の中継地として栄え、商港の役割も担っていた。利根川河口は浅瀬が多く、大型の船舶の運航は困難であった。そこで高瀬船に荷を積み替えるため大量の物資が集積され、湊の周辺の廻</p>	銚子市

			船問屋は「気仙問屋」と呼ばれるようになった。磯角商店はその廻船問屋のひとつで、建物は各地から運びこまれた部材を使い、 当時の湊の賑わいを伺い知ることができる建物 である。	
4-6	<small>ちょうし しゅうゆじょうぞう</small> 銚子の醤油醸造 (①玄蕃井戸) (②ヤマサ資料館) (③ヒゲタ史料館) <small>やまじゅうしょうてん</small> (④山十商店)	無指定	銚子の調味料が江戸の食文化を変えた とまで言われる銚子の醤油醸造。江戸の発展を支える労働力であった“江戸っ子”には色・味・香りが良く、味付けの濃い「関東風の醤油」が好まれた。これが、蕎麦、てんぷら、鰻の蒲焼、寿司など今に続く 江戸の食文化を花開かせた 。 銚子の醤油醸造は、元和2年(1616)に摂津国の酒造家の教示により飯沼村の田中玄蕃、正保2年(1645)には紀州から移ってきた濱口儀兵衛が事業に着手した。 銚子の事業家は、文化や医療など多方面にわたり江戸と銚子をつなぐ役割を担っていた 。	銚子市
4-7	<small>ちょうし いそめぐ</small> 銚子の磯巡り (①妙見様) <small>いぬまかんのん</small> (②飯沼観音) <small>いぬぼうざき はくあ</small> (③犬吠埼の白垂 <small>き せんかいたいせきぶつ</small> 紀浅海堆積物) <small>せんがいわ</small> (④千騎ヶ岩) <small>いぬいわ</small> (⑤犬岩) <small>びょうぶがうら</small> (⑥屏風ヶ浦)	国天記1件 県天記1件 (国天記・名勝答申1件)	東国三社詣(香取・鹿島・息栖)のオプションルツアーとして銚子周遊の小旅行が江戸っ子に人気を博した 。 「銚子の磯巡り」は、妙見宮や飯沼観音(銚子の観音様)として知られた円福寺などの寺社や「葦鹿嶋」「犬吠ヶ崎」「仙ヶ岩屋」など激しい波浪により生み出された奇岩からなる自然景観などをめぐる旅。中でも、「犬若」「名洗浦」からは、目の前に屏風ヶ浦の断崖絶壁が続き、遠くに富士山を望むことができる、富士見の名所として古くから人気があり、歌川広重の浮世絵の題材にもなっている。	銚子市

(※1) 文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

(※2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること(例：国史跡、国重文(工芸品)、県史跡、県有形、市無形等)。

(※3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること(単に文化財の説明にならないように注意すること)。

(※4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること(複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること)。

ストーリー

「お江戸見たけりゃ佐原へござれ、佐原本町江戸優り」。江戸時代の戯れ歌に唄われた当時の佐原の繁栄ぶりである。江戸に近接する北総地域は、江戸に続く街道と利根川水運を活かし、江戸を様々な形で支えながら発展した。そして、江戸との盛んな人と物の交流は、江戸の文化をこの地域に豊かにもたらしその繁栄を支え、特色ある都市群が形成された。

1 江戸に続く街道と利根川水運の発達をもたらした繁栄

千葉県の北部に位置する北総地域は、古代から河川・湖を越えて奥州に臨む要所として位置づけられ、中世には様々な勢力が抗争する地でもあった。江戸幕府もその地勢的な重要性から、佐倉に有力譜代大名を配し、江戸と佐倉間の佐倉街道も整備した。その後、この街道を経て成田山新勝寺へと向かう「成田参詣」の隆盛に伴い、成田街道とも呼ばれるようになった。さらに街道は東に延び、佐原・香取・鹿島といった利根川水郷地帯に集中する観光・信仰の一大センターへと続く。また、利根川に沿って銚子に向かう銚子街道は、佐原で成田街道と交差し、同所から銚子まではおよそ 40km の道程である。北総の都市の発展は、街道により支えられた。



七代目市川團十郎が
寄進した道標

北総の発展を支えたもう一つの要素が利根川である。家康の江戸入府後に、江戸の町を利根川の洪水から守るため行われた利根川の東遷事業は、北総地域を利根川の下流とし大きな洪水をもたらしたが、一方で、利根川東遷・江戸川の開削事業は、利根川の舟運を発達させ、流域には佐原に代表される多くの河岸も発達した。さらに、海難事故の多い房総沖を避け、銚子を起点として利根川を遡って江戸に向かう水運ルートは、東国各地の物資を江戸に運ぶ大動脈となった。佐倉藩も治水に取り組み、印旛沼に河岸を設け水運を活用して藩の特産品などを江戸に運んだ。

利根川水運は、商業的な往来はもちろんのこと、人の往来も活性化し、成田参詣も陸行ばかりでなく途中まで舟を利用した者も多く、また、香取神宮などの「三社詣で」や「銚子の磯巡り」など舟旅を楽しむ江戸庶民の小旅行の流行をももたらした。

このように、江戸へと続く街道と利根川の大動脈は、北総地域の発展を支える大きな柱となった。

2 百万都市江戸を支え、江戸との関わりで発展した都市群

当時、百万人の人口を有した世界有数の大都市江戸は、周辺都市・地域の支えにより成り立っていた。特に、北総地域は、利根水運の発達と整備された街道を通じ、様々な面から江戸の生活・幕藩経済を支えた。

要衝である佐倉は、江戸に家康が入ると有力親藩・譜代大名が配置(老中 8 名／藩主 23 名)されるなど、政治的・軍事的に江戸を支える重要な拠点都市であり続けた。加えて、幕末に開国へと導いた開明老中堀田正睦が藩校「成徳書院」を拠点に洋学の振興に努め、江戸に人材を輩出する学都としても発展した。特に、1843 年に「佐倉順天堂」が設立され、医学分野においては「西の長崎、東の佐倉」として、長崎と並び称され、ここで学んだ多くの若者が明治の医学界で活躍した。

成田山新勝寺は、歌舞伎役者市川團十郎(屋号:成田屋)の深い帰依と、江戸深川での秘仏公開のキャンペーンの成果もあり、江戸庶民の間で「成田参詣」がブームとなり、成田山とその門前町(成田)は大いに発展した。また、成田に向かう人々は、その途上、帰途に佐倉城下や宗吾霊堂など名所旧跡にも立ち寄った。

佐原は、江戸時代初めから酒造もはじまり、利根川水運と結びついた廻米・酒造・商業活動により、下利根随一の河港商業都市に発展した。また、香取神宮の参道の起点として参詣客を迎える町としても賑わった。なお、

今も賑わう成田山新勝寺



町は、旦那衆と呼ばれた商人（名主）たちにより自治的な運営が行われ、「大日本沿海輿地全図」を作った伊能忠敬もその1人で、経済的発展は地域の文化・学問にも影響を及ぼした。

利根川東遷によりその河口となった銚子は、天然の漁場を臨む好地にあり、江戸の人々に魚を供給する漁港として発展した。魚の江戸への運搬は、利根川と「鮮魚（なま）街道」と呼ばれる街道により鮮度を失わないように迅速に行われた。銚子は、今なお我が国随一の漁港として、魚好き国民の食を支え続けている。また、銚子独特の地質景観の奇岩の「磯巡り」は、文人墨客も好んで題材とし、銚子は観光でも賑わった。利根川水運の発達には、銚子を漁港に留まらず、東国の米などの物資を江戸に送る流通や、江戸前料理を支えた濃口醤油の醸造でも繁盛させ、当時の人口は関東地方では江戸を除き水戸に次いで多かった。



銚子口大漁満祝ひの図（橋本（玉蘭齋）貞秀）

このように、北総の四都市は、水運と街道を通して、政治・学問（佐倉）、信仰・観光（成田）、商業・水運（佐原）、漁業・港湾（銚子）により、江戸を支える大きな役割を果たした。

3 世界から最も近い「江戸」：江戸情緒の残る代表的町並み群

江戸との密接な繋がりの中でそれぞれ繁栄した四都市は、今の暮らしの中でも江戸の往時を物語るように町並みが残されている。また、城下町、門前町、商家の町、港町という江戸の代表的な町並みとして揃っているのも北総地域の大きな特色である。

佐倉では、佐倉城跡に本丸を中心に堀・土塁が残り、町中の道は狭く直角に折れ曲がる城下町の名残を留め、武家屋敷群が良好に保存されるとともに、旧佐倉順天堂の建物や藩校「成徳書院」や堀田家の資料（鹿山文庫）などにより武家の生活や洋学を学んだ者の足跡も偲ぶことができる。

成田山新勝寺には初詣や節分などで東京から多くの参拝客が訪れ、往時から続く成田参詣は今なお隆盛が続いている。伽藍には多くの歴史的な建物が残されており、門前町も昔からの町並みや雰囲気の中で賑わい、利根川・印旛沼の幸を生かした鰻料理は、門前町の名物となっている。

利根川に続く小野川の両岸に繁栄した佐原の町並みは、地域の人々の努力により保全・修復され、川沿いには川面に下りる荷揚げ用の石段「だし」なども残り、江戸情緒の残る往時の商人の暮らしを体感することができる。

銚子の漁港は、江戸時代初期に紀州から移住した崎山治郎衛門が築港した外川港から始まるが、漁港に面した斜面には碁盤の目のような当時の区画が今も残されている。また、利根川河口付近には、江戸時代から銚子の観音様として参拝者が多かった円福寺や漁師の守り神とされる川口神社、廻船問屋の建物など、港町の隆盛を物語る資産が残っている。

さらに、四都市には、その町並みの中で息づく伝統的な祭りが継承され、多くの観光客で賑わっている。中でも、夏と秋の「佐原の大祭」に、彫刻に飾られた総樺作（そうけやきづく）りの絢爛豪華な山車が「佐原囃子」の調べにのって、小野川両岸の伝統的な建造物の町並みの中を曳きまわされる「佐原の山車行事」には、今でも全国から大勢の人が訪れる。

伝統的建造物群保存地区の町並みで「佐原の山車行事」



これら北総の四都市は、日本の空の玄関成田空港からごく近く場所にあり、例えば、成田の門前町へは車・電車ではおよそ15分～20分の距離である。

江戸及びその近郊の都市の多くが、開発により昔ながらの風景・街道が破壊されて行く中で、北総地域に今も良好に残される佐倉の城下町、成田の門前町、佐原の商家の町並み、銚子の港町は、世界から一番近い場所に江戸情緒が残り、しかも同一地域にありながらタイプの違う4種の町並みで、江戸を感じることができる稀有な例となっている。

